教師を育てた
言葉たち

No. 014

新潟県立長岡高校
# 山﨑健太先生
やまざき・けんた

◎教職歴 15 年。同校に赴任して4年目。理科担当。「学校の中で、そして学校の枠を超えて教師同士の学びをつなぐことが、これから 10 年間の自分の使命」という考えのもと、県内の高校に呼びかけ、進路指導の勉強会を 19 年度に立ち上げる。

前任校で２年生の担任を務めた年の３月、校長から「４月からは、担任を外れて進路指導主事に」と告げられました。当時、３0代半ばの私は、校内で最も生徒に厳しい教師で、課題のある生徒を率先して受け持っていましたが、２年生まで担任を務めたそのクラスは学級経営で思いの外苦労し、高３進級を目前にしてもまだクラスは落ち着きのない状況でした。だから、「１日も早く、クラスみんなで受験に臨む雰囲気をつくろう」と新年度の構想を練っていた矢先の、思いもかけない告知でした。

校長室を出て、間近に迫った卒業式の予行演習のため体育館に移動すると、整然と並べられた卒業生の担任席が目に飛び込んできました。来年、自分はこの席に座り、生徒の呼名をすることができないのだと思うと、胸が苦しくなりました。クラスをまとめられないまま担任を終える悔しさを抱えながら、「そんな自分が進路指導主事をしてよいのだろうか」と悩みました。

数日後、年度末の懇親会で、私は同じ学年団で体育科のＳ先生とじっくりと話をする機会に恵まれました。文学を愛し、ユーモアにあふれ、生徒からも教師からも尊敬を集めるＳ先生に、私は自分の思いを打ち明けました。話を聞き終えたＳ先生はゆっくりと息を吸い、私に問いかけました。「**本当に美味しい米の作り方を知ってるか?**」。肥料、水、気候……そんなものが頭に浮かびました。少し間を置き、Ｓ先生は言いました。「種籾(たねもみ)に、冷水をかけるんだ」。意外な答えに、私は「なぜですか」と尋ねました。「種籾は、温かい水につけるとすぐに芽を出すが、そうしてできた苗は弱く、味も劣る。かたや、冷水につけるとなかなか芽を出さないが、厳しい環境の中でできた苗は強く、本当に美味しい米に育つ」。そして、こう結んだのです。「おまえがやってきたことは決して無駄ではなく、失敗でもない。この１年があったからこそ、おまえが担任したクラスの生徒たちは必ず強く、立派に成長するはずだ」。衝撃的な、そして救われた瞬間でした。

Ｓ先生の言葉を聞き、教師には、教科の専門性にとどまらない豊かな教養が必要であり、自分はもっと学び続けなければいけないと思いました。そして、Ｓ先生が、担任としての私の指導を見守ってくださっていたことに深く感謝するとともに、これまで学校で過ごしてきた時間の中で、多くの先生方からたくさんのことを自分は学ばせてもらっていたことに気づきました。先生方への感謝の気持ちがあふれてきて、春からは生徒のためだけではなく、先生方が生き生きと活躍できるように、自分のすべてを捧げよう……そう覚悟を決めました。

あの日から７年が経ち、勤務校も変わりましたが、どのような困難があっても前向きでいられるのは、この言葉と出会えたからだと思っています。先生方がお互いを認め合いながら生徒の可能性を最大限に高めていく学校をつくりたい。そのために今、自分が置かれている立場で何ができるか、何をすべきか。あの日以来、私はいつもそのことを考え、日々を過ごしています。

**新潟県立長岡高校**　全日制／普通科、理数科／共学／1学年約 320 人／ 2019 年度入試合格実績（現役のみ）: 国公立大は、東北大、東京大、名古屋大、大阪大などに 176人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、早稲田大などに延べ 455 人が合格。